

彙報

ベルンハルド・カールグレン先生 の長逝を悼む

河野 六郎

昨一九七八年十月二十日、スウェーデンの偉大な中国語学者ベルンハルド・カールグレン (Klas Bernhard Johannes Karlgren) 先生が逝去された。享年八十九才。先生は一八八九年十月五日に生まれ、一九一五年 Uppsala 大学で文学博士の学位を授けられ、一九一八年から一九三九年まで Göteborg 大学教授となり、その間一九三一年より三六年まで同大学学長を勤めた。一九三九年よりストックホルムの極東古代博物館 (the Museum of Far Eastern Antiquities) の館長として一九五九年まで在職し、一九四五年から六五年まで Stockholm 大学で教鞭を取り、以後同大学名誉教授として研究を続けられた。スウェーデンの科学アカデミー、および歴史文学アカデミーの会員に選ばれ、英国の王立アジア協会、フランスのアジア学会等の名誉会員に推され、我が東洋文庫の名誉研究員でもあった。

カールグレン先生が近代的な中国音韻学の創始者であるこ

とは周く人の知る所である。言うまでもなく中国音韻学の伝統は古く且つ長い。中国人が自国語の音韻を意識したのはその文字、漢字の創造とその発展の中に既に萌していたと言えるが、この文字の非表音性によって音韻はいわばその文字の背後に隠れて表には現れ難い。そこで音韻の究明に向かって不断的の努力が払われ、中国独特の音韻学を打ち樹てるに至った。しかしその音韻学は近代に至って西欧の言語学乃至音韻学によって新しく科学的に解釈されなければならなかった。その近代化の基礎を作ったのがカールグレン先生である。

先生は始めノルド語の研究を志したが、やがて中国語の言語学研究に専心した。清朝の末、中国に渡り中国語の諸方言を調査し、帰国してその研究成果を名著 *Etudes sur la phonologie chinoise* (Archives d'Etudes Orientales, Vol. 5, Uppsala, 1915~1926) [のも趙元任・李方桂・羅常培という錚々たる学者の手によって漢訳された。高本漢著「中国音韻学研究」, 1940 上海] として発表した。この中で、音声学の精密な知識に基づいて中国語諸方言を観察し、広韻その他の音韻史料を参考しつつ、諸方言を比較言語学的に考究して切韻の音韻体系の復原を計った。当時のこととて、王仁昫本切韻もいまだ世に紹介されていず、また方言についても直接の観察によれないまま、他書の記述を利用している点もあって、今日から言えば、資料的には決して十分とはいえないが、そ

の到達した結論は、大部分今なお諸家の依拠する所となっているのは誠に驚歎すべき洞察と言わなければならない。

この復原された切韻音を先生は *Ancient Chinese* (日本では中古音) と呼び、これを基礎にして更に遡って *Archaic Chinese* (上古音) の研究に精力的に進んだ。Etudes 以後の中古音を含む上古音の研究は次の通りである。

Prononciation ancienne de caractères chinois figurant dans les transcriptions Bouddhiques (TP. Vol. XIX, Leyde, 1920)

The Reconstruction of Ancient Chinese (TP. Vol. XXI, Leyde, 1922)

Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese (Geuthner, Paris, 1923)

A Principle in the Phonetic Compounds of the Chinese Script (Asia Major, Vol. II, Leipzig, 1925)

Problems in Archaic Chinese (IRAS, London, 1928)

Tibetan and Chinese (TP. Vol. XXVIII, Leyde, 1931)
Shi king Researches (BMFEA Vol. IV, Stockholm, 1932)

The Poetical Parts in Lao-tsi (Göteborgs Högskolas Årsskrift, Vol. XXXVIII, Göteborg, 1932)

Some Turkish Transcriptions in the Light of Irregular

Aspirates in Mandarin (国立中央研究院歴史語言研究所慶祝蔡元培先生六十五歲論文集、北京、1933)

Word Families in Chinese (BMFEA Vol. V, Stockholm, 1933)

The Rimes in the Sung Section of the Shi king (Göteborgs Högskolas Årsskrift, Vol. XLI, Göteborg, 1935)

上古音の研究の結果は Grammata Serica, Script and Phonetics in Chinese and Sino-Japanese (BMFEA Vol. XII, 1940) に集大成された。これは上記 Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese を拡大したもので、序論で上古音から中古音への変化および中古音から現代音(官話音)への変化について、中国語音韻史の総括的記述と本体から成っている。本体は辞典的形式になっていて、各字を諸声群にまとめる。その字形・字音の変遷と古典における字義が簡潔に要領よく記された極めて便利な本である。しかし先生自身のその後の研究により、またその他の学者の業績を参照して、この著作は新しい形を取るに至った。すなわち、中国語音韻史の総括的な全面的な書であるはずの Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese (BMFEA Vol. XXVI, 1954) として別冊刊行され、本体の方は Grammata Serica Recensa (BMFEA Vol. XXIX, 1957) として内容が別冊として出版されたのである。この二冊の携せたる精選

の跡が伺われる。

上記諸論文で 'The Reconstruction of Ancient Chinese は先生の論敵 Henri Maspero の傑作 *Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang* (BEFEO, 1920) に対する批判であり、この両作者の論争は中国音韻学の進展に大きな寄与をなした。

また 'Tibetan and Chinese は若き Walter Simon 氏の野心的な *Tibetische-Chinesische Wortgleichungen* (Mit. Sem. Or. Spr. Bd. XXXII, Berlin, 1929) の批判から論究を進められたものであるが、先生はこのような他言語との比較を行う前に中国語自身の語の発生的関係の考察が必要であるとし、そのためには中国語の単語族 (word family) の設定を音韻の面から追求すべきであると示した。その試論が *Word Families in Chinese* である。この論文は示唆に富む論文であるが、その結論があまりに印欧語的な発想に偏っているのは惜しむれる。これに関連して *Cognate Words in the Chines Phonetic Series* (BMFEA Vol. XXVIII, 1956) は諸声文字における語源関係についての考察で、面白い。なお晩年の上古音関係の論文としてこの二篇がある。

Tones in Archaic Chinese (BMFEA Vol. XXXII, 1960)
Final -d and -r in Archaic Chinese (BMFEA Vol. XXIV, 1962)

当然の事ながら、先生の興味は中国語の音韻のみ限られなかった。その音韻学の研究成果に基づいて独自の文法研究を行なった。有名な論文 *Proto-chinois, langue flexionnelle* (JA, 1920) はその標題の示すように、中国語が原始的には屈折語であったことを代名詞の音形と用法から述べたものである。この主張は一時歐洲の言語学界に波紋を投じた。

中国語の文法研究はその孤立語的性格により統語論および助詞の問題に帰する。中でも助詞の使用は中国語の文法史の研究に重要な決め手になる。ところで、中国の諸々の古典は中国語の文法史料として歴大な材料を提供するが、それぞれの古典はその成立に関して疑問を持たれることがしばしばある。左伝もその一つで、その真偽についていろいろ議論があるが、先生は左伝の助詞の用法を精細に調査して、*On the Authenticity and Nature of the Tso-chuan* (Göteborgs Högskolas Årsskrift Vol. XXXII, 1926) の中で左伝の本文の信憑性を検討を論じた。この論文は小野忍氏の邦訳「左伝真偽考」(文求堂、東京、1939) によって我が国で紹介されている著名な論考である。小野氏の同じ訳書に先生の *The Authenticity of Ancient Chinese Texts* (BMFEA Vol. I, 1929) が同時並行して記されている。この論文は古典のテキストの真偽についての従来の説に対する一般的な批判を述べたものである。なお *The Early History of the Chou*

is and Tso chuan Texts (BMFEA Vol. III, 1931) は周礼および左伝のテキスト問題についての先生の見解が示されている。

文法の研究には書経に特有な代名詞「厥」についてのものがある。Pronoun k'ue (厥) in Shu king (Göteborgs Högskolas Årsskrift Vol. XXXIX, 1933)。ほか興味深いもの Excursions in Chinese Grammar (BMFEA Vol. XXIII, 1951) と New Excursions in Chinese Grammar (BMFEA Vol. XXIV, 1952) の二篇である。前者は、王充の論衡を例に取って、その言語と論語・孟子・左伝・国語等の周代の著作の言語を比較することによって、王充の言語は周代の古典語に盲従したのではなく、王充の時代の言語の洗練された文語であることを実証したものであり、後者は、水滸伝・西遊記・紅樓夢・儒林外史・鏡花縁のいわゆる白話小説の言語が文法的に言ってそれぞれ違った方言に基づくものであることを論証したものであり、更に水滸伝と紅樓夢のテキストの問題にも言及している。いずれも助詞の用例の精緻な分析による研究である。なお、晩年の作に史記の言語についてのものがある。Sidelights on Si-ma T'sien's Language (BMFEA Vol. XLII, 1970)。

中国の古典についての先生の寄与は何と言っても詩経および書経の註解であろう。Glosses on the Kuo feng Odes

(BMFE Vol. XLII, 1970) は始めの二冊 Glosses on the Siao ya Odes (BMFEA Vol. XVI, 1944), Glosses on the Ta ya and Sung Odes (BMFEA Vol. XVIII, 1946) に続けて詩経の註解を終え、引き続き Glosses on the Book of Documents (BMFEA Vol. XX, 1948), Glosses on the Book of Documents II (BMFEA Vol. XXI, 1949) と書経の註解を完了している。先生は晩年左伝の註解にも着手し、Glosses on the Tso chuan (BMFEA Vol. XLI, 1969) 及び Glosses on the Tso chuan II (BMFEA Vol. XLII, 1970) として公にされた。これらは恐らく先生の丹念なカード作業の齎したものである。上に挙げた Grammata Serica およびその改訂版にはその結果を巧みに採り入れられている。

先生はまた詩経および書経の註解を基礎に両書の英訳を試みている。The Book of Odes, Kuo feng and Siao ya (BMFEA Vol. XVI, 1944), The Book of Odes, Ta ya and Sung (BMFEA Vol. XVII, 1945), The Book of Documents (BMFEA Vol. XXII, 1950) などがある。先生は詩経の翻譯がいかに難しかったかを Legge と Waley の英訳を比較して述べられ (BMFEA Vol. XIV 参照)、先生自身は文字通りの (literal) 翻譯を示すに過ぎず、文学的な翻譯に至っては後人に任す外はないと謙遜しておられる。

なお、以上のような文献学的労作のかたわら、*Legends and Cuts in Ancient China* (BMFEA Vol. XVIII, 1946) や *Some Sacrifices in Chou China* (BMFEA Vol. XL, 1968) のような伝説や祭祀についても実証的研究を試みている。

中国の古典の読解には仮借を心得ていなければならぬのは常識であるが、仮借の解釈には当然音韻学の知識を前提とする。先生は該博な音韻学の知識を元にして仮借の本質を明らかにし、その上で中国の学者が仮借と解釈している場合を先秦文献の実例について詳細な批判的研究を、*Loan Characters in Pre-Han Texts* を標題とする五篇の論文に発表している (BMFEA Vol. XXXV, 1963; II: Vol. XXXVI, 1964; III: Vol. XXXVII, 1965; IV: Vol. XXXVIII, 1966; V: Vol. XXXIX, 1967; Index: BMFEA Vol. XXXIX, 1967)。従来、古典の語釈に往々として安易に仮借として片付けていたものが多いが、この長篇の論文によってより厳密な解釈が要求せられることになるのであらう。

音韻学にして、文献学にして、古代中国の記録を資料とする限り、文字の問題が採り上げられなければならない。先生は夙に *On the Script of the Chou Dynasty* (BMFEA Vol. VIII, 1936) なる大書を通じて略述されているが、この論文の主旨は、文字の字形の変遷よりも、周代の文献に

記されている語の音形が詩経の押韻と諧声文字によっていかんじつ再建できるかを論ずる所にある。周代の文字を論ずる場合、当然金文を考えなければならない。ところが、現在では銘文を持つ出土品は厳密な考古学的調査を経ているが、以前は金文の銘のあるものは出土状況の明らかでないものが多い。そこで金文を言語史料として扱う前に、青銅器そのものの年代を考察する必要がある。かくてカール・グレン先生は考古学にも関心を向けられ、一九三六年以降の先生の業績は言語学よりも考古学、それも青銅器に関する論文が多い。

考古学は筆者の専門外であるから、一切割愛する。ただその中、*Yin and Chou in Chinese Bronzes* (BMFEA Vol. VIII, 1936) は素人眼には大変面白かった。先生はこの論文で、羅振玉・王国維・郭沫若等の中国諸学者の銘文研究を基礎として、銘文の特徴によって青銅器を分類し、その分類が器の様式的特徴による分類とほぼ一致することを確めて、青銅器の年代を論じている。*New Studies on Chinese Bronzes* (BMFEA Vol. IX, 1937) はその続篇で、器の分類についての補訂を行っている。この先生の議論が現在の考古学でどう評価されているかは知られない。

以上挙げたものは主として学術論文であるが、一般向けの著書も数種ある。

Sound and Symbol in Chinese (Language & Literature

Series, Oxford University Press, London, 1923)

Philology and Ancient China (Institutet for sammenligende kulturforskning, Serie A: Forelesninger, Oslo, Leipzig, Paris, London, Cambridge Mass., 1926)

The Chinese Language, an Essay on its Nature and History (The Ronald Press Company, New York, 1949)

最初のものは原著 *Ordet och pennan i Mittens rike* (1918) の英訳で、中国語の簡単な概説である。二番目の *Philology and Ancient China* は、ハルウェーに招かれて行った連続講演で、先生の中国音韻学の蘊蓄を平易に述べられた傑作である。その第六章に日本語に古く借用された中国語の単語についての論及がある。この本は筆者にとって思い出の深いものである。それは筆者が東京大学在学中、恩師故小倉進平先生が言語学演習のテキストとして二年使用されたからである。そういう関係でこの本ほど熟読したものはない。なお、この本は前期 *Sound and Symbol in Chinese* と

先生がロンドンで *The China Society* で発表された *The Romanization of Chinese* (1928) と共に、岩村忍・魚返善雄の両氏によって邦訳された「支那言語学概論」文求堂、東京、1937。第三の *The Chinese Language* は原著 *Fra Kinas Språkvärld* (Stockholm, 1946) の英訳で、すでにその道の大家となられた先生の中国語に関する一家言が伺え

る。

以上の粗描からも察せられるように、カールグレン先生の業績は音韻学から始まって、文法学・文献学に進み、更には考古学に及ぶという極めて広範囲の領域に亘り、また質的にも理路整然たるものばかりで、読んでいてその明快な論旨には唯々感服するのみである。しかも驚くべきことは、上記からも知られるように、第二次世界大戦の戦中戦後に亘って、先生が長い間館長をされていた *The Museum of Far Eastern Antiquities* の大型の機関誌 *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* (略称 *BMEFA*) の毎号に巨大な頁数を殆ど独占して悠々とその成果を発表しておられることである。これは、スウェーデンという国が賢明にも中立を堅持して、他国を余所目に統々と学問的業績を公にすることを可能ならしめたからである。この点、先生は誠に恵まれた環境におられたと言える。

最後に、言語学史の立場から先生の学問を考えると、十九世紀の言語学の最も輝かしい結実の一つと見ることができであろう。筆者などは、先生の *Etudes* を始め数々の論文を貪り読むことによって言語学に興味を覚え、その方法を学んだのであって、他のいかなる言語学者よりも先生の恩恵に浴した。この学恩によって、若い時分先生から二三のお手紙と抜刷を頂戴しただけで、ついに直接お目にかかる機会を逸し

てしまつたが、敢えて先生となすべからざる次第である。そして先生が二十世紀の言語学の所産である phoneme (音素) の論に對して否定的な態度を示されてゐるのを、強へ共感を覚える。上掲 Compendium の最後の「語を稱々長べざるが、然るに用やる」。

“In this paper I have deliberately abstained from all so-called »phonemic« speculations. Since I have tried in my historical review to determine all the elements of a Chinese language spoken in early Chou time, and similarly all the details of a northern Chinese language in Sui time, it might seem advisable to sum up these facts in a synchronic description, first of Archaic Chinese and then of Ancient Chinese, and in that connection to try to reduce all the phonetic details deduced through my diachronic demonstration to a smaller number of fundamental »phonemes« in each of the said languages. But in my opinion nothing would be gained by such an experiment. When we have in Anc. Chin.:

Div. I *kuan*

Div. II *kuan*

u existing before *d* but not before *a*, and *w* existing before *a* but not before *d*, it would be tempting to state

葉 報 原 録

that *u* and *w* are two aspects of the same »phoneme« and write either in both cases: *kuan: kuan*, or in both cases: *kuan: kuan*. But that would be quite arbitrary and, moreover, detrimental to our historical demonstration, for it is precisely the contrast between *u* and *w* that explains the descendants in Cantonese: I *kun*: II *kuan*, and it would be unwise to conceal the contrast in Anc. Chin. behind a normalized unity letter (e.g. *w*) because of a »phonemic« speculation.

The »phonemic« principle is, of course, of great importance in all language study and it is naturally and inevitably inherent in every description of any given language. But this simple fact should not entice us to over-emphasize it and make it the all-important feature in our language description, to the exclusion of other aspects of language description, just as great importance in the life of the language. There is a tendency among modern linguists to ride this hobbyhorse so blindly as to reduce their efforts to an intellectual sport to write a given language with as few simple letters as possible, preferably no other than those to be found on an American typewriter. This modern trend in linguistics has unduly simplified and thereby

distorted the real character of the languages so studied.
(ト夏)

この追悼文を書くに当って、在日スウェーデン大使館広報課の石井新太郎氏およびスウェーデンのストックホルム大学東洋語研究所中国学科の Gunnel Norrholm Shioya 氏に一方ならぬお世話になった。茲に厚く謝意を表する。また BMFEA Vol. XXVIII(1956) に載せられた Else Glahn 女史の A List of Works by Bernhard Karlgren は大変参考になった。もっともこの目録は一九五四年までの著作を網羅的に記しているが、その後一九五八年より一九七〇年までに少くとも BMFEA に二二篇の論文が載せられている。なお、アメリカのコロンビア大学の Hans Bielenstein 教授の簡単な追悼文が JAOS に載せられる由である。

筆を擱くに当って、先生の御冥福を心から祈るものである。

(一九七九・七・三)

金子良太氏の訃

榎 一雄

金子良太(りょうたい)氏は、昭和三年八月四日、真言宗

豊山派無量寺住職金子勇本師の次男として東京に生まれた。昭和二十年三月、豊山中学校を、同二十三年三月、大正大学専門部仏教学科を、同二十五年十二月、大正大学文学部印度仏教学科を卒業した。そして昭和二十六年一月、蔵和辞典編輯会の助手に就任、併せて桜ヶ丘高等女学校の教諭に任じた。蔵和辞典編輯会というのは、昭和十五年、河口慧海氏を中心として東洋文庫に設けられたもので、河口氏が昭和二十年逝去された後は池田澄達氏が主宰し、池田氏の歿後(昭和二十五年十月七日)は、昭和三十年四月から三十六年三月まで渡辺昭宏氏を中心となって、引続き資料を蒐集していたものである。金子氏を編輯会に入れたのは大正大学の壬生台舜教授であつたようである。壬生教授も河口慧海氏を助けて語彙の採集に當っておられた。

蔵和辞典編輯会の仕事は、昭和三十六年四月、新設の東洋文庫研究部チベット研究室に引継がれた。その中心となつたのは多田等観・北村甫の両氏であつた。

これよりさき金子氏はインドに留学するため、昭和二十八年六月、編輯会と桜ヶ丘高等学校とを退職した。インドではカルカッタ大学で仏教学を専攻する予定であつた。しかし氏はそもその目標であつたチベット学に専心するため、予定を変更して当時ガントックのウルスワティ・ヒマラヤ研究所(Urusvati Himalayan Research Institute)において所長ロ